Aug 4 1888 no. 121

The Woman's Magazine

女學雜誌

版權免許

一冊五錢
各土曜日出版
當府內無郵稅

明治廿一年八月四日發　(第百貳拾壹號)

社説
無名の英雄、戸内の戰死

論説
學年末休暇(山鹿旗之進)○女子教育主義(大鳥圭介)

批評
婦人言論の自由○石村桐陰居士夫婦の説

叢話
婦人病の元因(長谷川泰)○六十年の飢饑(自然道士)○一唱百嘆○信愛の土臺○孔子の馬○詠歌論

小説
さすがに双紙○小説神髄

佳傳
ラマバイ女史

寄書
岐阜縣下の淸徒に告ぐ(安藤たね子)

小供談

新報

外報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 121. August 4th, 1888.

EDITORIAL:— Nameless Heroes and Deaths on the Domestic Battlefield.

LEADING ARTICLES:— Girl-Students and the Summer-Vacation, by Rev. H. Yamaka; Spirit of Woman's Education, by Senator K. Otori.

CRITICAL NOTES:—"Joshi Genron no Jiyu" (Woman's Liberty of Speech); "The Houswife" by Mr. S. Ishimura.

MISCELLANIES:— Causes of Female Diseases, by Mr. T. Hasegawa; Conjugal Love; Golden Dusts; How Confucius got back his Horse; Japanese Poem, by Mr. Sasaki; An Impertinent Wife, by K. M.

NOVELS:— Sasugani (VI); Bouquet of Novels.

BIOGRAPHIES:— Punditta Ramabai Sarasvati.

CHILDREN'S COLUMN.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

一册枚數七十葉定價二十錢全國無郵稅

去十三日出版せり

通信女學第十一巻發兌

盖し最良の教科書

婦人會員の會讀及戸内の獨學に宜ろし

女學雜誌社

●昔時の女子　（其一）

左は此頃避暑の折心よ任せ筆に任せて諸の隨筆中より收錄せしものあり今日我國女子教育の不振を嘆せらるゝ貴女にして一覽を賜はらば古來學者間の議論を知るのみならず服制遊戲人情風俗待遇教育職務の變遷よ關する一斑を伺ふの材料ともならんかと信じ巖本君に乞ふて女學雜誌の余白を假ることとはなりぬ　　陸前　簑笠庵主人識

○元龜の頃には高祿武士の妻女も乘物に乘ることなく嫁入の時も痲のかつぎを着て負木と云ふものに尻かけて後ろざまに負はれて行ける由又貞享より以前には嫁取振舞の時淺黄に散らし鬪の絹の着物しゆちんの帶に茶の革足袋に花をやり又平常は花色染の木綿着物に細帶一筋にて女は姿を作れりとぞ（三省錄）

○士の妻女稱して御新造といへり何如よも此字義あたらず御深窓と云べきを誤まり傳ふるものか御深窓は奥樣と云ふに對し稱するなるべし李白の詩に美人捲ニ珠簾一深窓嚬ニ蛾眉一と作り長恨歌に楊家深窓に養はれしといへり何れにも御深窓と書くが禮なるべし秋齋間話の新艘の說野にして陋哉陸氏が傾城の新艘の說は可なるべし（橘庵漫筆）

女學雜誌 第百廿壹號 明治二十一年八月四日發兌

社説

○無名の英雄、戸内の戰死。（上）。

近年、ジヨンロードと申す學者が、偉人傳五巻を著わし、之にビーコンライツ、チフ、ヒストリーと謂へる題名を加えましたが、譯して、歴史上の燈明光とか稱うべき意味にて、餘程面白き味わいのある名前ぞと思ふです。實に東西古今の歴史を通覽すれば、世の中が怒濤激浪を巻立て丶、只管ら荒れに荒る丶とき、若しくは四面たゞ暗黑と成つて、霹靂甚雨いとゞ物すごしとでも申さう有樣の時勢に當ては、必らず一二の大聖人、大預言者、大豪傑が現はれ出で、屹然として岸頭に立ち、其の燦然たる光りを放つて、天地四方を照らすものである。左れば此の如き偉人を稱して、歴史上の燈明光と申すは、甚れだ當を得たるとにて、且つ亦た、甚れだ愉快ある譬え樣と存じ、密かに感服致したるとである。

然し、之を燈明光と稱するは愚か、尚ほ之をお月さまとも、又た太陽とも、御勝手に尊稱して、少さか差支へなきとと信ずれども、左らばとて、世の中は只だ此等の燈明光のみにて治まりたり、進みたり、と思ふは大ひなる誤まりである。卽いち、此等の目に立つたる大ひなる光をのみ、聖人と申し、預言者と申し、豪傑と申すは、大ひなる誤まりである。世には、光を發せざる所ろの燈明が在る、音もなく香もなく毫末も人に知られざる所ろの豪傑、預言者、聖人が、至る所ろとして、甚はだ澤山に存在して居るとである。

吾人は、好風景を甚れだ愛するものであるが、彼の詩人、哲學者たるエマーソンは、之に付て、尤も優美なる志想を吟じ出したです、其の「別々、一躰」と題する詩の中に申しました、野に出で丶、風景の佳絶なるに見惚れ居る所の汝ちは、其時、彼處の小山の巓きより此方を見下し、鍬を肩げて佇立する所ろの農夫、もしくは亦た、彼方の牧場に於て聲高く鳴く所ろの小牝牛は、何如に汝ぢの心を慢しませ居るかを覺らざるならん。彼のナポーレオンは、アルプス山を超えんとて、一歩一歩、路に艱やむ折柄、偶と馬の手綱を止めて、遙かに前面の景色に心を止むる折節、眞午の鐘、空に響ひて鳴り渡つた、帝は何如ほどに感じを深くされたるか、多少推察せらる丶となるが、鐘を鳴らしたる寺番は殆んと無心にして之れを鳴らしたのである。かように、吾れは何

にとも心付かずして、日々に日を消らす平常の所行が、思いざりき、隣人をして其の道徳論を定めしむるの材料とも成つたるとにてあらう。

夜明けて、村雀め赤楊の枝に囀づる、余は其聲の天よりするかと迄でに聞き惚れて、其夕べ巣を取つて家に持ち歸つたり、翌る朝した、復もや例の如く囀づつたり、然し其鳴くや少しも快よからず、毫も昨朝の味わひなかりしが、之は余が巣を持歸ると共に、彼處の河、彼處の空をも持歸るとなかりしゆえにて、雀めは今ま只だ余が耳の爲めに鳴き、余が目の爲めに鳴くのみなれば、扨ては其聲もいや樂しからぬとは悟つたり。

濱邊に美しき貝あり、今ま打上げたる波の水、したゝつて寶石の玉を飾れり、余れ掻い取つて拾ろひ上ぐる、此の時波濤またもや打寄せて、貝の拾ろわれたるを哮り祝う、余貝を抱いて、草を擦り、泡を拭ひ、此の海に於て生れたる珍寶を、家に持歸れば、最早濱邊に於て見たるほどの美しさは去りぬ、此の美しさは、彼の太陽、眞砂、荒らき波の音と共に、彼處の濱邊に遺し去つたるにてある。

嗚呼、此の如くあれば、抑も美麗とは頼みに成らぬものかな、幼年未熟の折りにこそ之に欺むかれたれ、幼時の悞しみを後に棄て去ると共に、最早や美麗と云へるものをも后に棄て去つたり、斯る僞わりの見榮を頼まんより、本然の眞實をこそ願いんと、……

つぶやき乍ら足下を見れば、匍松は美なる花環を卷き、苔むす地上を走しり、菫々菜は氣を吐ひて余が口中に吹く、樫樹松栢余が周りに立ち、松球樫實地上に横わる、仰いで見るに永遠の天余が上に懸り、光と神聖とを以て充滿したり。

更らに流るゝ所ろの河を見、更らに朝たの鳥を聞けば、美麗と云へるもの、余が五官を通つて竄入す、余は遂に圓滿したる此の「全躰」に服しぬ。

即ち、「手に取らで矢張り野に置け蓮花草と」云つたに同じき意味で、凡そ風景々色の美なるは、決して一物一ケ所の力にては無く、其近邊惣躰の合したる効能である、嵐山の櫻を觀て、櫻が美しひと云ふは至らぬ論で、啻ゞ爛熳たる櫻が能く其景色を美にするのみでなく、其の圓ろき山、其の澄みたる天光、に至る迄が、矢張り彼の美觀を助け成すものである。

松島の美は、松の生えたる島にのみ在らず。天の橋立の美は、

天橋の一走したるのみに在らず。嚴島の美は、其の鳥居、其團々たる山の島、のみに在らず。皆な其外に、大ひに之を助け成す所ろの風光景色の存する故なり。

吾人は亦た、詩歌を甚はだ愛するものであるが、之を愛するが故に、亦た時々は自からウナリ出すこともある、之をウナリ出すこともあるが故に、亦た斷えず古の詩聖歌仙の恩を尤とも感謝する所ろのものである、然し亦た之を感謝するが故に、亦た斷えず、未だ聞かず未だ知らざる所ろの、無數の古の詩人歌人に對して、甚はだ謹んで同樣の感謝を捧ぐる所ろのものである。」之を何故ぞと申すに、諸君試みに「月」と呼び暫らく瞑目して深く心を靜めよ、此の月と云へる聲に打れて、吾人の吟腸は乍まち振動し、忽焉として杜鵑が一聲を遺して鳴き渡る趣きも思ひ出され、忽焉として遠征の孤客が三笠の山を見て泣たる趣きも思ひ出され、赤壁に矛を横たへたる曹操が慷慨も思ひ出され、數行の過雁を見て古鄕を慕ひたる大將が事も思ひ出さる。此れと同じく、「雪」と云ふか、「花」と云ふか、「砧」と云ふか、「戀」と云ふか、凡そ此類の言語を呼び出さるゝときには、日本人たる吾人の志想に、電氣がヒラりと通ずる如く、乍まち油然として美妙の感じを惹き起すとである。」然るに、此等とは打變はり、玆に大洋と謂いて見よ、山と云ひて見よ、小丘と謂ひて見よ、雲雀と云ひて見よ、吾人には左したる感じもなく、左したる吟腸も動かず、云く雲雀、云く小丘、云く山、云く太洋と聞取るの外、何の思ひも起らざることあり。然れども、今ま之を英語にして、試みに「ヲーション」と云ふて見よ、云く「ヲーション」‥‥。云く、「スカイラーク」‥‥。云く「ヒロック」‥‥。云く、「マウンテン」‥‥。此に於てか、苟くも英詩に心得あらんものは乍まちにして心を打たれ、茫々として宏漠なる、而も其上に大船を浮めたる、彼の大洋の事がいろ〳〵に思ひ出され。又引續ひて、青空朗らかなる所ろに、雲雀、憂もなく、懸念もなく、最と淸らかに、上へ上へと飛揚し行く彼の愛すべき有樣が、いろ〳〵と思ひ出され。又た、山の溫和なる、小丘の最と靜かなる、其の蔭の暗らき、其の面ての笑らへる有樣に至るまでが、歷々として目に見ゆる如くに見ゆる。」抑も之は何故に斯樣なる感じ方の相違ある乎、即はち其の「スカイラーク」と云ひ、「マウンテン」と云ひ、若くは「月」と云ひ、「花」と云ふ所ろの文字に、數多の志想が、附着して居るの故と、申さねば成らぬ。夫故え、紫式部が作つたる源氏物語を一方に置き、

末松君が譯されたる其の反譯を一方に置き、試みに之を比較して讀みて見よ、又た百人一首なり、謠本なり、萬葉集なりを一方に置き、チエムバーレン氏などの反譯を一方に置き、又同じく試みに之を比較して讀みて見よ。元來同樣の主旨を綴りたるものにて、而も其の反譯は餘程達者に出來居るにも拘はらず、此を讀むときと、彼を讀むときと、讀むものゝ感じ方に莫大の相違がある。之れは即ち、日本の文字には、其文字にいろ〳〵の附屬したる志想があり、西洋の文字には、亦其の文字にいろ〳〵の附屬したる志想ある故にて、之は何如なる反譯者、何如なる著作者と云へども、決して一朝一夕に彼此を移し變ゆることの出來ぬものである。」左れば、如此く、一字一字に數多の先哲、寧しろ廣ろく申して、數多の先人の志想が附着して居るの故に、例へば、今日此の下手なるウナり手たる吾人が、雲雀と云へる者に感じて一の詩歌を吟ずるときは、此の詩歌は、吾人と云へるものゝ感じに加えて、シエレー、ヲイヅヲルスなどと云へる詩仙の感じを合せ、更らに亦た、シエレー、ヲイヅヲルスをして昔日に感ぜしめたる其もろ〳〵の感じをも合はせ、此の立派なる數多の感じを以て、今の吾人が詩歌を聞く所ろの人の心を動かすのである。

其他、月を吟ずるにも、花を吟ずるにも、山、大洋を吟ずるにも、皆亦たそれ〴〵に斯の樣なる關係あるが故に、今日吾〳〵人の拙なき詩歌にだも、萬一人が感心することありとせば、決して之は吾人一二人の力によるとは思はれず、既でに多くの先人の助けを得たる故と有がたく感謝することである。」夫故え、「チーミング、イーラ」(命名時代)より遙かに後ちに在る、即はち昔しに既に幾多の詩人歌人が現はれて、並大躰のものには既でに並大抵の志想を吹かけ、既でに之が爲めに多くの詩歌を吟じ去つたる后に、其后に出現したる詩人歌人は、新奇非凡の作を得ることが餘程にむつかしひ」と、往々學者等が申すとはあれども、之れ亦た一理にして、吾人の茲に言ふ所ろも亦た大切の道理である。チヨウセルは、定めし勝手に新思想を吟じ出すの便利もありしならんが、亦た其の新思想を凝めて吟じ出したる詩の一句一句は、亦之を聞く所の人を動かすに於て、餘程の困難ありしことゝ思はる。即はち後の詩人は、既に先きの詩人が吹込み置たる土台に加へて、其の新思想を組立るものゆへ、其の困難は甚はだ少く、其の人を動かすは反つて大ひに容易ならん。耳に聞にくき俗語が、遂に雅語と爲り、雅語によつて詠出でたる歌は、珍らしき志想を含まずとも、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

先づ一寸としたる歌の樣に聞ゆるの道理は、即はち此の雅語の中に、數多の立派なる志想がこもり居る故である。」此の故よ、吾人が産の苦しみをして、漸と一つの腰折を得、此の腰折が、辛うじて人樣を引立るの元氣を吹込み得たりとあらば、之れ大ひに古の詩聖歌仙の冥助を得たる故と有がたく感謝するとである。然し、古の、詩聖と云ひ、歌仙と云へる、名人大家と云へども、又た之をして大家名人と爲らしめたる所ろのものがある。グレー、ゴードスミスはドライデン、ポープに恩を負へる所ろあり、ゴードスミス、ドライデンは又たミルトンに恩を負へる所ろあり、ミルトンは又たチヨウセルに、チヨウセルはダンテに、ダンテはブハーシル、ホーマーにと、各其の負へる所ろあらんと存ずるが、又ブハーシルに致せ、ホーマーに致せ、亦之を詩聖に成し上げたる、無數の師匠あるに相違ない。而して、ダンテ以下のもろ〳〵の名人なりとて、決して只だ、先哲を師匠としたるのみに非ず、世の中の治亂興敗も之に敎へ、一身の榮枯得喪も之に敎へ、頑是なく遊ぶ子供も之に敎へ、可憐なる谷間の姫百合も之に敎へたるに相違なし。左れば、吾人は、斯る古への名人大家に感謝すると共に、亦た之を名人大家にしたる無數の聞えざる師匠よ感謝し、而して其の所云る師匠なるもの丶中には、一草一木、百性子供、時勢貧富の如きものをも數へ入れて、均しく亦た之れに對して、あつく感謝を呈する所ろのものである。

息子が英學を六かしひと言ふを、ヲヤヂは何のソンナであらうと嘲ける。ヲヤヂ嘗て耶蘇敎の會堂よ行て、西洋人の說敎を聞き、歸つて息子に云く、英語はさう多く違ひはない、今日西洋人の語ばが大抵は分つた、息子云く、其は宣敎師が日本語で說敎したのです。

論說

○女學校の夏期休業

山鹿旗之進

左らぬだに、夏の日とて、土さへさくる苦熱の堪え難く、けふ此頃の、一ときは暑きに、書を讀み筆執る業の、更に物憂き心地せられ、只何事をも抛ち、只管暑を避り時を移すよ、工風を凝らしぬ、斯て余は一日机に凭たれ、暫く恍惚として、何の深案もなき時、夢か現か將た幻か、躍如として余が眼前に顯出し來るものあり、仰で之を眺れば、彼の亭々として雲表に聳え、白冠正坐するが如は、名にしおふ津輕富士かと訝れ、(奥州津輕弘前よ在り)伏して之に臨は、苔、緑に水、清く、滔々として夏なほ寒きは、岩木川かと疑はる、彼所には、富田の

松原、地上の虹に似て、風、颯々、此所には、慈雲院の森、鬱蒼として蟬の聲、喧すし、心ある故鄕の山水、みな活きて、余を歡迎するが如し、今夫れ、無情の山光水色、余が夢裡の歸鄕を祝すると、既に此くの如し、况てや恩愛の情、あり難き、父母一族に見え、己が生立よりの竹馬の友と、語らふに於てハ、其歡、果して如何計りぞや、一年、三百六十五日、明ても暮ても、讀書文筆の裡に、うづもれし身の、飄然として、籠の中を飛び出せしが如く、此七八兩月、向ふ六七十日間を以て、氣を散じ、身を養ふの、夏期休業となすとハ、學校の生活、氣樂ある哉、書生の身の上、樂敷かな、アー人生の歡樂、固より多しと雖ども、此無罪にして、一種別味ある、書生の境涯を、誰か又、浦山敷思はぬ者ぞある。

今や東京府下、數十の學校に遊學せらるゝ、數千百の女生徒諸君にハ、盡く學校を引き拂ひて、各思ふ處に行かれしならんが、抑も卿等ハ此夏期休業をば、奈何に消光せらるゝの思召にや、或ハ疾に二三の同志を語らひ、暑を函根に避け、或ハ此期を機會として、窃に取越し勉强に、日來の鬱憤を晴さんと意氣込み、或ハ鄕里に歸て父母に事へ、友達を訪づるなと、日本全國各地より集合せる、女生徒諸君が、宛も蜘蛛の子を散らせるが如く、四離八散、爲めに女學校の門前、寂寥として人なく、神田小川町には女生徒の影を見ず、皆何地へか趣れしには、相違なかる可し、然らハ卿等ハ此夏期休業をば、如何に消光せらるゝの思召にや。

(一。)遊散保養を專一とすべし、時計ハ、日に、一度巻き、人間ハ、日々半バ休み、尺蠖ハ先づ縮み、而て後伸ぶ、人間の仕事ハ、朝から晩まで、一調子に遣り通さる可きものに非らず、社會の事業ハ、韋太天走りに、直進す可き者に非らず、人ハ先づ内に十分養ふ所ありて、而て後之を外に施すべき者也、彈丸込みなき鐵砲ハ、恐るに足らず、余之を學者に聞く、人若し同一の職業を、同一なる有樣に執りて、三年の間、勉めて止まざる時にハ、其人必ず、不測の疾病に罹るか、左なくも大に健康を害ふ可しと、此說果して然るか、然らば書生の仕事ハ、隨分難義の者にて、始終思想を練り、深案を凝らすの職柄なり、豈に休息せずして可らんや、其れ然り、然れ共、今之を書生の身に取りて考るに、彼等常すら、競爭の氣湧が如く、名譽の心、燃るが如く、日來の苦學、其の効顯はれ、今や將に、同寮生にも凌駕せんずるの時、忽ち二ヶ月、六十餘日の夏期休業に遭ふとは、如何にも又た口惜しき限り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にこそ、之を譬るに競馬の名人、轡を揃て、既に馬場の大半をば、馳け付け、口、泡を吹き、腹、涙を打ち、叱咤、一鞭あわや、勝負を決せんとする時、忽ち休息の鐘聲、鏘然、場内に響き亘る、其殘念思ふへし、此に於てか、切めてもの心遣りに、四五冊の書籍を才覺し、咄、此休業には誓て、此等を讀み果し秋期の大試驗には、特別の拔擢に預らんと企望し、又た中には、先期の落第を遺憾とし、好機會ころござんなれと、人知れず、盜み勉强して、執念くも、學文の宇治川先登を試んとする者あるべし、是れ皆、書生社會の常態なれば、今更咎めだてするには非らず、然れども余諸君の爲めを計るに、此等の方樣は果して其企望を達せしや、否やを問ひ參らせざるを得ず、余は甚だ之を覺束なしと思ひ、深く疑なき能はず、开は又何とか云ふに、女生徒方迚、よも、天外には、避暑退校せられざる者を、何とて世間通例の道理にや外づれん、休の間には、思ふ樣に勉强も出來ず、歸校の後も、休足らぬ心地し、可惜、休暇を只グツ〳〵と過き去るとあり、遊ぶ時に能く遊び、學ぶ時によく學ぶは、書生の美風と存じ候、左れば夏期二ケ月の休業も、遊ぶ爲に休むに非らずして、學ぶ爲めに遊び、其少しく勉强せざる所以は、其大に勉强する所以とこそ思はるれ。

(二)家事を見習ふも亦肝心なり、此春、三四月の頃にやありけん、東京其他の男學校にては、頻に、騷動が流行し、某校の生徒は、學則の不完全に不平を鳴らして、同盟退校を申し出で、役員幹事の壓制に不服を唱へて、校長に强談し、一時は隨分八釜敷かりき、然るに流石は女性の優しき故にや、余は未だ何の女學校にも、左る荒々敷事ありしを聞ず、否な其聞かざるはこれなきの證據にして、余の深く感心する所也、其比ろ或學校の外國教師が、其學校騷動の顚末に付き、或る日本新聞紙の誤を正さん迚、之を横濱の横字新聞に投載せし事ありしやに覺ゆ、其文中、今日の日本の子弟は、相當なる父母の指圖を受け、以て就學する者に非す、書生自身が勝手次第に、學校の撰擇去就を決し、學文の取捨進退を定め、甚だ危險なる有樣なりとの、意を述べしやの如くに記憶せり、余思ふに、是唯、男書生のみ然るに非ず、若し男子すら父母の曾て學ざる高尙の學文をし、父母と雖とも其大切なる學事に至ては、全く一言の指圖出來兼るに於ては、女子は尙一層甚しと云はさるを得ず、云はゝ、今日の女學生は、無人の境を横行し、學問の獨旅をせらるゝにて、實に山の大將我一人、親

類縁者誰一人、御身の學識には及ぶ者あるまじ、左れば偶休暇の時に歸宅するも、父母は更なり、四隣合壁誰とてお話の相手となる者なく、之を在校の生活に比ぶれは、萬事手鈍く感ぜらるゝ事もやあらん、勢既に此の如くなれば、我から敢て高ぶるとには非らされ共、無鳥嶋の蝙蝠、自ら家内に翺翔して、一家二人の主あるが如し、時に偶ま母の助言するあれは、倒さに理攻めを食ひ、此が當時の學校氣風かと、窃に愛娘の生ひ先きを案じて獨り心を傷らるゝの母御前もあらん、要するに、敢て斯る不作法ある振舞を、せらるゝ積りには非らさる可しと雖ども、久振の事にて、氣樂なる我家に歸り、特に優しき母親の膝に近きしとなれは、坐ろに、幼少き時の思ひ出でられ、只オボコらしく母御に甘へし戯と見做せば、深く咎むる事にも非らず、然れ共此に一言申し度は、父母兩親に事へて一軒の家事を見習ふと是なり、諸君は良し、學校に在て、家事應對の稽古をば、爲さるゝにもせよ、此等は僅かに其雛形其眞似事たるに過ぎざる可し、余は夫を輔け家を治むるのみを以て、御婦人方の職分とは存ぜす、然れ共此内政の一事は御婦人方の尤も長所にして尤も應は敷職分あるべし、此義果して相違なしとせば、其學校に在て書を讀み文を綴るも、亦將來一家の良弼たる資格を備るの方法にして、學文其物は目的にあらじ、然ば横文を暗唱するも高慢するとなく、唱歌を妙に吟ずれば迚て、横柄なる面色なく、只管順々として父母に事へ、他日學校を出れば、我志を伸べ、我學びし所を施すべき王國は、正に此家族てふ一軒の内に在りと心得られなば宜しからん、然ば學校の夏期休業も、方法と目的、理論と實際、宛も物理化學の講義を聞きて、後更に實物機械によりて、其聞きし所を實驗するが如く、又植物生物の理學者達が、暫く書物を抛ち、其熟讀せし草本昆蟲の採集に出掛るが如し、寔に樂しからずや。

（三）學校の活ける廣告となるべし、重ある女學校には、皆德育上一定の主義ありて、神を敬し人を愛し、智識に道德に、積誠以て、女性の女性たる品格を發達せしめんことを勉めらる、就中彼の外國婦人傳道會社の設立に掛る、博愛仁慈なる基督教婦人の薫陶せらるゝ者の如きは、其最も著しき者也、而して此等の尊敬す可き女豪傑が、日夜血涙に咽びつゝ、其滿腔に溢るゝ計りの精神を以て、之を生徒に吹き込んとせらるゝは、抑も又如何なる故ぞや、生徒病ある時は、教師手づから湯藥を進めて、夜、衣帯を解かず、生徒健康なる時は倶

に園中に戯れて、其心を慰め、生徒哭く時ハ、教師哭き、生徒歡ふ時ハ、教師亦歡び、其交情の親密なると、水魚も啻ならざるなり、然に生徒彼等自身ハ、更に此等に氣附ざるべしと雖も、覺えず知ざる間に、盡く教師の氣質に慣れ染み、世人ハ既に早く御身生徒達を推して、其學校の看板とし、主義とし、廣告とし、又吹聽者と見做せり、アー今日の女生徒ハ、十目の視る所、十指のゆびざす所、一擧手一投足と雖ども、寔とに油斷の出來ぬ身の上ぞかし、左れば女學生の暑中休暇に乘じて、其の家に歸るや、親類友達爭て其門を叩き、先づ其恙なきを祝ると倶に、只何呉となく事の珍しさに、都の手振ハ更なり、學校の模樣、生徒の有樣などを尋ねらる可し、此に於てか銀座通りの繁昌を以て答ふるか、學校の壯麗なる西洋造を以て告るか、余ハ云ふ此等を語るも敢て害なし、然共先づ學校の主義、教師の親切、生徒の氣風を吹聽するを以て專一とせざる可らず、啻に之を口頭に云ふのみならず、日常の言行を以て廣告すべし、卿等ハ相圖の鐘と共に起き、又相圖の鐘と共に寢ね、出入規則あり、休息時間あり、毎朝禮拜し、毎夕祈禱し、又聖日にハ校中朋輩擧げて教會に詣り、講義を聞が如き、其規則の嚴正なると、左ながら兵隊の調練の如し、余ハ女學校の生徒方に望む、諸君ハ斯く迄鄭重に仕附けられし身なるを以て、特更之を講釋して他に聞かするにも及ばじ、唯明け暮假染めの間にも、曾て學校に在て受け得たる、氣風を以て、曾て學校に在て仕込れたる、規則正敷行儀作法を以てこれを父母朋友の傍に再演するとにてある、是何よりの看板なり廣告なり又吹聽なりと思はる。

上來述べし所、慢に推測の卑見を吐き、或ハ其當らざるを信ず、然れ共幸にして其實を去る遠からずとせば、父母ハ安堵し、朋友ハ感服し、斯て一年又一年、全國各地より都下に遊學せらるゝ女學生徒が、一夏毎に、打てハ返し、返しては、復打よする、浪の如く、波濤洶湧、以て女弊を一掃し、以て女學を一新し、以て女權を擴張せられよ。

○女子教育の主義（其二）

大鳥圭介　社員筆記

第三　賢母とは、既に良妻と爲り、子を擧ぐれば、朝夕其養育に心を盡し、淳良賢明の人物を造るとを、最大の職務と致す。然し、斯る人物を得の道は、分娩后より始まるものにあらずして、尙早くより其覺悟なくては成らず。凡そ孕兒は姙娠后四箇月を經れば、已に感覺を生ずるものなれば、其頃より母の言語擧動を愼み、精神を和愉壯快にし、憤怒憂苦を避

（九）

け、身躰を適宜に運動し、起臥飲食の度を定め、書を讀むには英雄賢哲の傳を撰び、樂を奏し、歌を詠じて、心を慰藉し、分娩後は特更に意を注ぐ。赤子は世に出るや、直ちに乳を欲するの慾を發し、或は哭き、或は笑ひ、或は母の言葉を聞分け、又顏色を察し、自然に智を開くことを求むるものなれば、母は常に顏色を和らげ、言葉を優にし、決して憤怒の氣を含まず、朝夕慈愛の念を一にし、溫和の氣質を養成し、あしき癖の出るを防ぎ、哺乳の度を定め、(赤兒の泣くは躰の爲に益あり害なし、泣毎に乳を與ふるは甚はだわろし)日々身躰を浴みし、衣服を淸潔にし、居宅の寒暖、空氣の流通を斟酌して健全を謀り、追々成長して飲食を爲すに至れば、食物の性質分量起臥食時の刻限を正し、間食を制し、勉めて戶外に出で、淸氣を吸はしめ、氣隨我儘の氣質と見るときは、少しも假借なく懇々之を戒しめ、早く惡癖の萌芽を絕つべし、西洋の或る學者の說に、人の善惡賢愚の別は、小兒出生後四年間の養育如何に因ると云へり、果して然らば、母たるものゝ、赤子初期保育に於ける心得の大切なること、實に驚ろくべきなり。本邦に於て乳母傭下婢の十の八九は愚昧無識なり、今ま小兒を此等のものに托し置て、母の看護撫育を怠たり、成長後才俊を獲むと欲するは、所云る木に緣りて魚を求るの類なるべし、豈に恐るべきの事にあらずや。小兒更に成長して、步行に堪ふるに至れば、寒暑甚はだしき時を除き、勉めて庭內に遊ばしめ、或は野外に伴なひ、風日に身を曝らし、身神を壯快に保たしめ、傭下婢に負はしむるを禁ずべし。此時に至り、母の仁慈寵愛の情は、益す厚き者なれば、朝夕に撫育して、子供の心の感動を發達せしめ、耳目を銳敏になし、併せて嚴密の制を設け、從順の氣質を養なひ、愛に溺れて放肆の念を發せしむるなかれ。而して年齡已でに滿三才に及べば、成るべく幼稚園に入れ、他の兒童と共に遊戯せしめ、交友の情緒を發達し、醇良溫和の氣風を養成すべし。但し幼稚園に遊ばしむるも、決して之のみに依托して足れりとなす可らず、朝夕の出入に綿密に意を加へ、寸時も油斷なきようになすべし。

序でながら、幼稚園の事に付き、一言申置くべし、近來都鄙ともに此設けあり、兒童誘導の爲めにその大切なること、いふ迄もなし、去り乍ら余嘗て一二の幼稚園を參觀せしに、幼稚園を以て小學校の初步の如くに心得、急に六かしき事柄を敎へ、又其父兄も小學校の門戶の如く見做し、年齡不

相當の事を記臆せしめんと望むものあるよしなり。是れ、誠に大なる謬見あり、三四歳なる小兒の身神は誠に軟弱なるものにて、決して無理なる教課を與へて之を疲勞せしむ可らず、抑も幼稚園は、各父母の膝下にて育つべきものを、一處に集めて、都合よく緩急を斟酌し、交際の意を含み、遊嬉運動せしめ、後來教育の地歩を爲すものなれば、急に習字讀書等の業を授けて、重荷を負はしむるは、却つて害あるも益なしと知るべし。

親二人、妻一人、及び自分、都合四人の口を糊する丈けの力がなければ、決して男とは言はれね。

批評

(78)。婦人言論の自由　(中本一册二十九頁定價十錢　發兌所東京飯田町婦人矯風會)

此書は米國婦人矯風會に於て出版したる矯風叢書の一部をば佐々木豐洲女史が譯述せられたるものなり。文章流暢にして且つ力あり議論尤も有益の卓識多し、今ま編者が其序文と爲したるものを左に轉載して細評に代ゆ、

女學雜誌社嘗て女學演説會を發起し本書の譯者を初じめとして其他内外五名の閨秀に請ふて公けに演說會を催うしたり。時に事故あり傍聽を女性に限ぎりたるの故を以て世人大ひに之を異しみ或は其の主旨の聖經に基づくと爲すものありき此に於て余其否らざるを辨じ且つ「堂內緘默」の經語を解して些さか婦人言論の自由を束縛するの道理なきを論じたり。而して今此書を見るに及んでは當時多少の辛苦を以て經營したる解釋は此に於て尤も平易明白に解釋せられ倚ほ且つ層一層に理を盡して其漸滔々極まる所を見ず讀去つて或は驚ろき或は喜び或は雀躍して殆んど手足の舞蹈する所を覺ひざるに至る。蓋し基督敎の聖經は其義眞とに高大極美なり之を解する別に活眼を具ふるを要す但だ彼の迷信の徒いたづらに辭句に拘へりて眞義を誤まる其意之を傘ぶに在つて反つて大に之を貶すものあり嘗て某會話論を見るに「談ずるもの先づ口を啓け主の山上に訓を垂るゝ先づ口を開くとあるが故也」と論せり思ふに彼の女子會堂內に口を緘せよと云ふもの蓋し亦た此類ならん。抑も基督教は偶像を斥ぞけて靈拜を傘とむもの也而して啻に聖書を敬し其字句を傘とみ眼力章句以外に徹して能く其眞意を味はざるものは亦是一種の偶像信徒たるを免かれざる也。豐洲女史が此譯眞に吾人に眞正の靈拜を敎ゆるものと云ふべく之が爲に幸福を享るは啻に婦人の言論のみに止まらざるを知る」然れども余が此書に於て特に尤も歎賞して措く能はざるものは本書元著作の由來記に在るなり。記に云く月明の夜わらは眞人と共に出でゝ逍遙す偶ま會堂に入りて共に座に就く時牧師會後の集會に御婦人の退所あらんとを請へり蓋し婦人をして發言せしめざらんとするなりわらは密かに眞人の面を窺ふに眞人此時勃然として立ち反論して之を不可とすわらは實に晴天霹靂の思ひありき然れども直ちに携ふる所の速記用紙筆を取出して則ち眞人の論を速記す記して成る所のもの則はち此書なり論終り牧師會衆と共に感唱する時眞人と共に會堂を出でゝわらはは一言を云はず但だ眞人の手を握る、と是れ抑も何等の美談ぞ。大凡そ此書を讀んで婦人言論の自由を喜こふ所の女性は須から〱先づ殊に此の一段に注目すべし。

殿本善治

○近時の女學論

(一)。石村桐陰居士(貞一)は婦人敎會雜誌第五號に於て、「夫婦の事」と題する、尤も驚ろくべき御說を示さる。云く、

昔し伊弉諾尊、伊弉册尊が、磤馭盧島を國のみはしらとして左右より旋りて同會たまふとき、陰神(伊弉册尊)まつあな。。。。。。。。。。。にえやえをとこをとのり玉ひければ、陽神(伊弉諾尊)よろこびたまはず、吾は男子にしあれば、ことはりまづ唱ふなるを、なぞも、をみなのかへりて、さきだち、ことゞづるを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すでに、さがなし、めぐりなほせと、のり玉ひて、こゝに二神また更にめぐりあひましぬ、このたびは陽神まづあなにやにをとめをとのり玉ひて、夫婦となり國を開き給へり、これ我日の本の夫婦の道の始めあり、夫婦といふ夫の字は、篆書に亣とかきて、男子の通稱といふ、すなはち一人前の男といふ形なり、又夫なるものは知をもて、人を帥ゆる者なりといふ、婦の字は女といふ字をへんにして、帚といふ字をつくりとして、よめと讀む、この字をもて見れば、よめはよろづをつとの指圖に從がひ、自からそうぢなどもするものなりと、知るべし。

晉の庾袞が、其兄死して娘のありけるを、嫁入さすとて、草にてちりとり帚を作り、一族あつまりいたる中にて、娘にわたしいましめけるに、汝今日より舅姑につかふまつるべし、家掃き清むるとは、嫁つかへのつとめなれば、これをあたへて汝がたからとす、ねがはくは朝夕いろおだやかに、心うやくしく、つかへ侍るべし、といひきこへけるも、婦の字の義を能く知るものといふべし。

今時には、隨分に面白きお說あり。昔し、天下を掃除して、家の中は掃除せぬと言ひたる人あり、然し細君は、何卒家の中も掃除して下さい、夫の心配をも掃除して下さい、一家内の小言をも掃除して下さい、尙ほ餘力あらば世上の惡風をも掃除して下さい、何んとなれば、桐陰居士の解釋に據れば、婦は是れ帚を持つ所ろの女なるが故也。

ツバキの花四つ五つを火鉢に燻せば鮫滑りとなります。

叢話

○婦人病の元因　長谷川泰

大日本婦人衞生會月次演說會場演說　佃與二郎筆記

私が今日御話し申上まするのは婦人病の原因と申題で凡此の國が文明開化に趣きますると云ふと、從て開化と相伴ふ一の弊害が必ず免かれませんものでありまして、御婦人方に於きましては、男子とは違ふて、一種男子に無い一ツの御病氣があり容易ならざる結果に至ります、斯の如き病氣は色々有ますが殊に此開化の進歩と相伴ふ弊害から生ずるものが尤多數を占めて居り升、其原因に就て聊か淸聽を煩しまする積りてあり升。

扨婦人病の原因と云ふ中にも種々雜多の原因がありまして、中々數へ盡す譯には往きませんが、其の中で重もな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る原因が六ッあります。其第一は空氣並に運動の欠乏なるのです。第二には神經系の發育過度と申まして、凡此人間の身體に於きましては身體を動かす所の筋と云ふものが有ッて、或は步行するとか動くとか色々の事をするものです、神經とは御承知の通り、我々が物を視ると云ふものか、聽くとか、文字を讀むとか、總て智識上に關係致しまする事、其外寒熱痛痒を知りまする事、斯の如き作用は、皆神經と云ふ、肉體の中ちに通ッて居る筋の樣なもの丶働きだが、此作用から起るのです、總て人間が今日健康にして生活を營みまするのは神經系の發育の度と、筋の發育の度が、恰好并行しなければならない、若しも神經の發育の方が割合に過ぎて、筋の發育が不充分なれば、種々なる病氣を釀します、是が第二の病原で。第三の原因は、衣服の不適當で有ります、御婦人方が召します所の衣服が適當致しません所から、色々の病氣が起りまして、是が爲めに御一身のみならず、或は御子樣迄關係を有しまする樣な、不容易の疾病を釀す事が有ります。ソレから第四、第五、第六は御婦人方にのみ有ッて男子に有りません所の一種御注意になる可き者でありますが、是は少し申し惡くいが、名丈けを申しますれば、月經時の身體の不注意か或は御子樣が生れた分娩後の不注意から、起る事もあり、又結婚時に、身體の健康不健康に關して、大層御婦人方に御病氣の事が有りますが、特に御婦人方にのみ限りまして男子に無い所の一ッの病が發生する事が有りますが、其原因は、只今申しましたる六種の物の何れかより、發生するのです。尤今第一から第六迄申したのは、從來日本の御婦人方の衛生上の欠點に就て、研究或は探索した點から申上まするのではありません、是は、外國に於きまして、歐羅巴或は亞米利加等に於て、只今申上ました或る原因の中から疾病を釀す所の現況に就て、申す積りであります。

ナゼなれば、私が西洋の現況を述るに就ては、聊か考へも有るのです、當今世の中の風潮を倩々觀察するに、實に滔天の勢いとも申しませうか、云はゞ大洪水が出て堤防を崩し、數十里間の人畜を流す可き勢いで、何んと是を形狀しませうか、私只何んとも申されません、驚く丈けの次第で有りますが、ソレ故に、從來に日本に有りまする衛生上の欠點等に於て、病の有る事は姑く之を措て、目下の風潮に依れば、寧ろ外國に視る所の疾病の原因が、或ハ我國に於ける貴夫人淑女よも適當しはしまいかと思ふ所から、西洋の御婦人方の御病氣の

原因に、尚一二の鄙見を申述べようと云ふ考へで御座い升。」

ソレ故に只今申した原因は、是を言葉を換へて云へば、開化の美麗、文明の粧飾です、是から起る所の婦人病の原因と云ふ精神です、開化美麗と云ふ中ちでも、殊に我東京の如き、只、都府、開化、美麗から起る所の婦人病原因に就て申す積りです。扨只今申した所の一より六迄の原因の中ちで一々之を申しても、餘り事柄が措雜して、却て御聞き苦しき次第と思ひますし、或は又醫者の方に寧ろ關係が多くッて、普通衛生の方からは餘り關係が少くない點が無きにしもあらずと考へる所から、第一第二第三と、此の三ッの事に就て鄙見を述べて、高聽を煩します。（未完）

○六十年の饑饉　　自然道士

俗に曰く良らぬ女房は六十年の饑饉と蓋し良らぬ女房を帶ものは生涯饑饉に會ふに同じとの意ならんか道士は幸にして良らぬ女房もなく又六十年の饑饉に會ひしともあらざれば當否は固より知るに由なけれども朝三暮四を逆ゆるだに饑饉は苦しきものぞかし况て六十年の饑饉と云はゞ餘ほどに苦しきものなるべし。

一人「時にどふだねー○○の細君は　友人「大變なものだ、此の間もね、いつもならば○○居るかとづか／＼上りこむんだけれども此節は先生がツンと扣へて睨んで居るだろふと思ふたから先づ玄關から四角張ておたのみ申すとやつてみたところが、女中が出て來て手を支へたから、そこで○○君はお內かねーと尋ねると、驚かふか驚くまいか障子の穴から例の先生大きな眼玉をおむきなすつて、覗て居やしたが、障子越よりのお差圖に「誰樣か姓名をお聞き」だ、大變なものだろふ、僕も少しくグッと來たから女中の聞くのも待ないで、直接ながら、僕の姓名を高らかに云ふと、先生橫合から、又々一槍お入れなすつて、「留守だとお云ひよ」と號令鋭どくかけなすつたところなんどは何とも蚊とも云なかつたぞ　一人「さふだろふ○○も隨分困るだろふて的は仲々快活な面白い奴であつたのに何だか近來は欝々ぶさいで居るやふだ　友人「うつ／＼もしやふぢやないか集會所か何かの樣にあれ程人の行たところが今かんこ鳥が鳴て居ると云ふ風情だものを僕も餘程の要事がなければ最早彼家へは往ない積だ、若往て居る中に食事時にでもなる騷にや何斗に○○が心配するものか、默て放任ておくときには轉倒箒に頰包位の用意なんどはしかねもしないが懶惰で澁的と來てゐるから一時になろふが日暮になろふが客に

御饌の氣がつかふか隨分弱たことがあるて、そこで〇〇が氣を揉んで一寸引込んでさゝやくと怫々返事が此方まで洩れきこゆと云ふ譯だものを、堪らない話ぢやないか、〇〇も可愛そうだ飛だ豪傑をもらつたもんだのふ　一人「可愛そふ位な處ですめばいゝけど、的は生平から外貌と違つて、隨分物事の氣にかゝる方だから色々お事を心配して氣拔としたものにならなきやいゝが、其樣例もまんざらないとはないからねー、時に僻目かは知ないが的の元氣が近來衰へたと思ふと同時に文章が餘程衰へた樣だ、君〇〇雜誌をよく視玉へ的が細君を娶る前の文と近來の文とを比較てみるに例の的の健筆で意表斬新の説を吐き紙鳴り墨躍るかと疑ふばかりの文章が近來は何だか澁々して小言ばかりを云ふやうだぜい、其は又其筈であろふぢやないか名山大川を跋渉して神氣を壯活にしたればこそ史遷は名文をかいたと云ふに、日々良からぬ女房に氣分を腐らかされた日にや史遷ならぬ〇〇の筆力衰るも尤だろふ、があれでは永くつゞくまい、何か思案もないものか云々。

その友達話は何處の話にや知らずといへども廣き世間にはかゝる例もありぬべし夫れ彼の女房客に對し夫に對する既に此の如く擧動ふとせば同じ心の同じ人ゆへ其舅姑に對し隣家に對し下婢に對し會ふ人每に相對して果して如何あるべきか盖し良き評判は得がたかるべし、啻に良き評判の得がたきのみかは恐らくは至るところ愛を傷け、平和を破り、喜悅を損ひ而して終には夫をも惱殺すべし懼るべし怖るべし斯ては六十年の饑饉に比すとも亦敢て無理ならざるべき哉。

〇一唱百歎

後醍醐天皇

さして行く笠置の山をいでしより天か下には隱家もなし

藤原藤房

いかにせん賴むかげとて立寄れはなほ袖ぬらす松の下露

上杉謙信

武士のよろいの袖をかたしきてまくらに近きはつ厂の聲

〇信愛の土臺

みどり

樂しき家(ホーム)を造るには、理窟ばつては行かぬ。悟つて見れば意味も無い詰らないと思ふやうなことでも、之を互ひに語り合へば信愛の基ひとなる。兎角、夫婦間の疎遠になるは、お互ひの心に遠慮して、とも〴〵に打明すことが足らぬより起る、固より裸躰になつて不行儀を極むるが、遠慮のないのだと云ふでは無い。成るべく信じ合つて、成るべく相談し、成

るべく萬事を知り合ふようにするが、双方信愛の土台である。然るに、忠信藏の義士は、家に歸りて妻には申聞けずと誓言し、正成が遺言には、餘まり母親に萬事を相談すなとある、必竟之は女の方々が至らぬゆえである。夫の言つたとを他人にチ・シャベりしたり、人に洩らすなと云はれたとを心配して、獨りで詰らぬ計略を運らして見たり、所云る女の淺墓なとを爲さるゆえに、遂に、女には腹を許せぬ、何でも大事は洩らされぬと云ふように爲つた、實に殘念の事です。夫婦信愛の基ひは、互ひに心を打明け合ふに在る、而るに細君がチシャべりで輕卒で、夫が心を打明すに足りぬときは、迚も十分の信愛は出來ず、迚も樂しいホームハ出來ぬ、實に、殘念の事です。

○孔子の馬

孔子の馬放れて稻を食へり、百姓腹を立て、捕へて還さず、孔子お弟子中第一の辨者、子貢と云へるを遣いして之を求めさするに、子貢禮儀を厚くし、辭を盡し、利害を説いて、最と鄭寧に喩せば、彼れいよ〳〵怒ッて返さず。ソコデ孔子さま、其の馬飼を遣るに、馬飼何の禮儀もなく、「どうもお百姓濟まなかッた、己らが貰ッて歸るぜ」と只だ一言を交へて、難なく連れて歸りける。

評。辨舌は、向ふ相應であれ。

○詠歌論、第一篇、歌の沿革。(つゞき)　佐々木信綱

爲家卿に三子あり爲氏爲敎爲相と云ふ二條家毘沙門堂家冷泉家と各家を分ちたれば歌躰も異同あり後に毘沙門堂の流れ其家絶たれば世人は二條家冷泉家の説を守り制禁にのみかゝはり歌ハたゞ實法によむべきものぞとのみ思へりされども頓阿兼好兼良公榮雅卿などハかゝる制禁の法則にしばられながら難なくよみえられたるハいともつとめたる業といふへし。後龜山天皇の朝に宗良親王新葉和歌集を撰び玉へりこれ南朝の忠臣の歌多く入たれバ眞心なる歌がちにて其姿もいとよろしさて足利氏の頃になりてよろづ衰へたる中にも歌は猶人々もてはやして公家のみならず武家の名ある大將たちにも歌を好める人多し毛利元就吉元川元春はとによくよまれたり又北條早雲廿一箇條に歌道なき人は無手に賤しき事なり學ぶべし云々又武田信玄の家法にも歌道嗜可事云々と其家來に歌よむ事をすゝめられたり其他此比の武將のよみ出し歌にはすぐれて勇壯にをかしき歌多し豐太閤の頃細川玄旨蒲生氏卿などいとよくよまれたり。

德川氏になりて天下泰平になりしより學術もやゝひらけて古

雅に復せる中に歌の道のみは久しく縉紳家の家業の如くなりにしかば世人皆その家にて定めたる制の詞といふ事を守りその詠則に從ひいつも〳〵同じやうなる歌のみよみ出るやうに成はてにしを天和元祿の頃ほひ下河邊長流僧契沖荷田春滿戸田茂睡などはじめて二條冷泉家の法を改革し假字用格をも昔に改め制の詞をも破りて復古の學を興されたるより歌の道大にひらけたりこれ歌の七變なり。

荷田春滿の弟子賀茂眞淵大に古學を唱へ古言をあきらめて其よめる歌も奈良朝のをゝしき姿を好みて萬葉集のよき躰の歌に倣ひ前後におぼえぬ上手なりしかばその門人本居宣長荒木田久老村田春海加藤千蔭等皆其學風をつぎてこゝに至りて歌の風大に改まれり其他藤谷成章小澤蘆菴伴蒿蹊清水濱臣橘守部等各一家の風を爲したり以上擧げたる人の弟子の多くの學者出て歌文を專業とし心々に敎へたるもの多し其中に北村季吟有賀長伯等は猶二條家の法を守りて各家を起したりかく家々の風躰おのがむき〳〵なる中に古學者と唱ふる人々の歌は近躰の歌の中に古言をよみいるゝ事を好みていはゆる頼政の射たりし獸の心地すなるが多かりしに足代弘訓香川景樹などは其風躰の混雜なるをあしき事とて三代集の比にもとづき又一躰をよみ出られたりこれ歌の八變なり。

これより歌の風大によくなりてかの古學者流の歌よむ人はいと稀にありにたるに猶田舍には古躰家などいひて實の古躰には非ず古言をよみ入るゝのみにて歌の姿はいと近きさまなるが多きはいとも〳〵わかぬ事になん。

歌道の沿革おほむねかくの如しされば歌道の家起りて歌道大に衰へ數百年に及びたりしを古學者出てこと〴〵く敗りたれど又古學者は前に論じたるやうのくせあれば今よりは歌の姿も世につれてかはりゆく天然の者なれば詞にも近古の差別ある事をさとりて古人を梯となしみづからさとりて今の世によく叶ひたる姿詞になさまほしきわざなりかし」。（未完）

ラムプのホヤは煙草の煙を一杯に吹込み暫く兩口を押へ居り其后に木綿のキレにて中を拭ねば奇麗になります

小說

○さすがに双紙

美妙齋主人

第三篇　獅子は燈心で縛れない。（下）

今までは栗殼の心は全く鬱憤に包まれて居ましたが、此處に料らず時子の事をわるくいふ攻道具を見付けましたので何處やら心も輕くなつて今度はこの攻道具の振回方に一身の力

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を籠めて來ました。
「堀田の一條それは私も聞きました。　聞きましたが元より……」。
「跡形も無いことだと仰るのですか。　貴君もやつぱり暗まされましたね」。
「噓にちがひありますまい」。
「どうしてッそれは斯うなンです」　膝を進ませて聲を潜め、　「吾儕の目で見ればあの堀田に何も取る處は無いやうですが、しかし或る種類の人に言はせれば中々の才子だそうです。それが例の人にも氣に入ッたのでしやう、日外あの、それ、○○會の時、ね、あの時子が琴を彈きましたらう。　さア、あの時、あの時が肝心の……」
跡は聲が幽微になッてしまッて全く他へは聞えませんが、たゞ花房の顏色はすこし憤怒を含んで來ます。　霎刻して話は終ッたと見えて、栗殼の聲はまた高くなりました。
「どうです。　駭きましたねエ」。
「いや、しかし栗殼さん」、　言て花房は屹と顏色を正しました。「貴君は其一伍十什を何處から御聞なさいました」。
「いや、何處と言ッて……」
「貴君が御自身に篤と御覽なさッたンですか」。
「は……え？」
「御覽なさッたのなら證人になつて下さい」。
栗殼は花房の權幕が只ならぬので、ぎよッとしました。
「まア、それはどうでも宜うムいます。　が、貴君、栗殼さん、貴君までがそのやうな流言に迷ふとは」、　冷笑して唇を甞め。「……から言へば愛に暗んで居るやうですが、貴君にはあの時子の平生の見識が見えませんか？」
「見えませんか」　の語氣は過激でしたから、栗殼も（その外の原因も有りますが）勃然としました。
「見えますさア」。　まるで突出す樣な調子で。
「ね普通學は無論有て、其上に專門の音樂には長けて居し、顏はまたあのとほり美しく、夫で高ぶる氣色が無て……」
「大層御のろけですね」。
「いや恍惚氣ぢやありません。　そして氣を高尙に構へて居る鹽梅、あの學校に二人と類は……それは浮說も出もしましやう。けれど平生の見識から推せば決してそンな馬鹿なことは無いわけです」。
「それッきりですか」。

「何が？」

「ノローキングが。」

「え？」　答は爲ずに花房は先方の顏を覗みました。

✦ ✦ ✦ ✦

それから程無く花房は自分の部屋へ歸ッて居て机の前へ坐ッたまゝ腕を組んで考へて居ます。

「だうも最初から變だと思ッたが、どうしても彼奴時子を見込んで居るのだな。　あゝ時子をわるく言ッたなら乃公も見捨てゝしまふだらうと思ッて……人、あいつの器量も狹いなア。　あるほど色香を以て愛を起したなら隨分土臺の堅固して居ない讒言で迷はされることも有るけれど、元々乃公と時子との間柄は單に色香を愛でゝ起した愛情の中では無いから……しかし、見ば彼奴もよッぽど時子に熱心して居樣子、恐らくは此後彼奴のする所爲は時子たちの前へ行ッて己の讒言を爲るのだらう。　だう爲たッてかまふものか。　時子だッて讒言を見分ける見識は持ッて居るわ。

色々に考へて來ればその以前の經歷が現然とまだ胸に浮かんで來ます。

「忘れもしない、日外の園遊會の時、乃公と時子とははじめて知己になッて……それからしたしく交際を爲て來るやうになッて……あの時子と差向のとき……我ながら思出すのも恥かしい……戯れた言葉を乃公が言出したら、さも陋むだといふやうな眼で此方を睨むだばかり。が、その眼先が……恐くは無ッたが……何となく心に浸徹ッて英氣もまるで挫けてそのまゝ默てしまッたが、考へればその後から時子が乃公に對する擧動は前日よりも猶親しくなッて來て……乃公が那の時眞正に婦人を愛するといふことを悟ッた處が恐ろしい。

此頃流行の疾辨でも無く、落付いて居て、氣が利いて居て、どこやら高尙で、氣韵が有ッて……情交、本當の情交潔白な愛情といふものは迚もこの人間には得られる物では無いだらうと前には乃公も思ッて居たが、そりやア皆誤謬であッた。

婦人にそれだけの德が有りさへすれば……が、しかしそれを鑑識する男子は少なし、また婦人の方にも持ッて居るととも少なし……あゝ時子ばかりは……實に賢い淑女だなア。

誰が讒言なンぞあッたとて……」

思開けば胸もおのずから開け、窓に忍ぶ殘月の影も夜風の枝に促がされて踊るごとくさながら這方の喜悅を分かつて呉れるやうに見へます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「嗚呼高尙に之を迎へれば宇宙も全で高尙に見えて來るかなァ。何だッけ、コルリッヂの愛情の詩、さァ是から那を讀まうや………」。

○小說神髓

蘇格氏著　ケチルチルス（第二十四回）

シウルスベリーは甚いだ奇しみて何人を執へ申すべきかと伺ふに陛下は彌よ急立玉ひ彼處なる反逆人レスター侯の外に執らうべきものなし早や〳〵と命じ玉ふ。抑もシウルスベリーはブーリン家の血緣によつて陛下の母方の親戚と爲り平素衆に超えて親しう仕へ申せども當時第一の寵臣たるレスター侯が今ま一朝逆鱗に觸れて斯く嚴しき御怒りを蒙るとは云へ餘まり早く之を執らへ過たりとて後日に至り反つて亦た御不興を受けんとのなきにもあらじと懸念し恐る〳〵陛下を慰さめ奉りてまづは靜かに遊ばさるやうにと諫む、陛下はシウルスベリーが事の緣故をも知らず左樣に申すは無用なりとて受入れ玉はざるときエメは夫を思ふの情よりして其身が是迄に蒙むりたる害惡を忘れ果て先刻レスター侯が何事をも御存知なりと申したるは眞赤なる僞わりにて侯は固より妾わよ害を御加へありしとなしと辨ず、陛下は其言の前後に矛盾するを聞きとがめて汝ぢの申し條判然せず汝もし人に遣はれて欺を云ふとならば王后の怒は炎の如くなるとを記憶せよ敢て之に觸るゝなと叱り玉ふ、レスター侯は首べを垂れてあり乍ら此の始終を聞てエメの眞實に心を打たれ高尙なる思想勃然として起りイザ是迄の罪惡を悉く白狀して自から罪を明らかにすべしと今はや首べを擧げ將に口を開かんとするとき………

バーチー惶たゞしく大急ぎに走り來りて御前に跪まづく、陛下何事ぞと顧み玉へば、バーチー平伏して謹んで申す何卒臣が罪を御許し下さるように此塲の不始末は皆な臣が致す所ろなり決して無罪の主人を御叱りなきようにと願ふ。時にエメはバーチーを見て大ひに叫けび妾わに何れ程の御怒りを與へらるゝとも宜し只だ申しようなき此の大惡人より妾わを御救ひ下され。陛下、彼が何事を爲せしぞ。エメ、妾は若し彼を見て在れば狂氣いたすやも知れませぬ。陛下、汝ぢの言語は前後矛盾の事多し定めし餘程に混雜して居るとならんシウールスベリーに之を預くる間だ事の明らかと相成るまで大切に保護せよと命じ乍ら熟ら後前を思ひ運らしてレスター侯を疑がひしは御自身の過ちなりきと悟り今まは温言を賜はつて切りに和らぎを求めらるゝに、レスター侯は只だ默然として首を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

下げ心中種々の思ひに難やみて何にとも答へなし、陛下は彌よ之を氣の毒に思し召されバーネーに向つて仰せらるゝは、エメの事に付ては何人も判然としたる答へを申さず汝ちは彼の夫なれば今日の始末を明白に述べ得るとならん、バーネー特更らに憂ひたる面色して御覽の通り臣が愛する所ろの夫人は斯る淺ましき病氣に懸りましたれども前刻差上たる診斷書にはわざと遠慮いたして發狂とは記し申さゞりき、陛下、そうあらう／＼彼の洞穴にて面會したる樣子今まあちらへ參る時の素風何如にも左樣に見へる然し左樣ならば何故に逃げるようには取計らひたるぞ。バーテー、フホスターに守らせて候ひしに狂氣者の常として色々に困丹し遂に逃れ參りしなり之を御調らへ下さるれば相分りませう。陛下は稍や解けたる御樣子にて汝ちが家の内の不幸は察し遣はす然し今ま汝ちを見て大ひに叫び餘程よ嫌らひ居るようなり何如にせしことぞと御尋ねあるに、バーチー巧みに涙を浮め凡そ狂氣者は不斷尤も近しく致し居りたるものをば尤も嫌らうものなるよし兼て御聞及びの候べし。陛下、成程左樣に聞きて居り又左樣に信じて居る。此に於て陛下はレスターに向ひ君は朕に對して不平なる所もあらん朕も亦た君に對して不平あり然し朕先づ之を許すに付き君も亦た其の不平を散ぜられよ、レスター侯胸に切まりて陛下が少かだも臣に害を御加へあらざるとゆへ固より臣が亦た少かにても怨み奉まつるの事なしと云ふ、之れより獵の遊び初まるホラは鳴り犬は哮り馬は走る表ては萬事滑らかに治まりたるようなれども人々は皆な安からず思ひて何にやらん遊びも引立たざりけり。

（ペンキが着物につけば石炭油を附たるキレにて拭ふべし）

佳傳

○ポンヂタ、ラマバイ、サラスバチ女史

印度の女學者ラマバイ夫人の事に付ては本誌外報欄内に於て屢ば記載したるとあり恐らく既でに讀者の知己と爲りたらん然るに同女史は近日其印度への歸途我日本國へも立寄らるゝ旨過日通信ありたるを以て今先つ其の略傳を左に揭げて預じめ之を讀者に報ずと云ふ。

二年程の前方より米國合衆國に渡りて非常の評判を蒙り居るゝポンヂタ、ラマバイ、サラスバチ(Pundita Ramabai Sarasvati)女史は印度二千萬の人民中六人の有名ある女學生ある其一人なり性は印度の貴族にして父は著名なるブラマ宗の僧侶たり

元來女子の敎育に就ては國民惣躰の意見に反して特に甚はだ自由なる考へを持ち居られたるより其の細君即はちラマバイ女史が母を同國の國風として僅かに九才の時に貰らひ受けられたるが之を厚く敎育することに決しぬ然るに其親族の輩ら皆な之に反對して女を敎育するなどとは以ての外の事なりとて甚たく之に逆らひたれば氏は此等の人に離れ便利自由なる國都を去り獨り彼の花嫁を伴つて山間森深き所に入り自から之を敎育せんとは思立ち數多の妨害ありしにも拘はらず遂に其如くに執行はれたりける。

然るに細君ラクシミバも巳でに成長し目出度氏に婚して數年に二三子を擧げぬ斯て又た都城の印度人も追々と此の森林先生の高名を聞き此の森に來つて敎を乞ふもありければ頑陋守舊の天竺界に一塲の自由なる女學校を此の森林内に開設したりとは見へたり而して彼のラマバイ女史は其の末孃にて西暦一千八百五十八年即ち今を距る凡そ三十一年前の四月に出生あり當時は父なる人も既でに大ひに老衰したれば多くは其母なる人の膝に懐かれ乍ら或は樹林の鳥音を聞き或は經典の句を暗誦しつゝ日に日に學問を修めたり。

抑も印度の習俗として婚姻は八才以上十二才以下の間だに執行すべきものと定まり其の制度甚はだ嚴密にして鐵の如く何如なる理由あるとも之を破る可らず稱して之を印度の鐵法と申す左ればラマバイ女史が姉も此の制度に隨つて八才の比ろ或る少年と婚姻したるに此の少年初めは彼の森林内に於て敎授を受けたるが後には久しく來らず凡そ十三年を過たる時突然來りて彼の妻を申受けんと云ふに此の婦人は右の年間に十分なる敎育を受けて既でに立派なる女學生と爲り居たれば好し假令ひ幼時に其の契約は爲したりとも今ま何んとも分らざる此の少年に一生を托するあたはずと言張り父母等も亦た同く無宿流の乞食に類する斯る男子に愛孃を渡す能はずと主張し敢て其家を出さゞりしに當の少年は扨て置き頑固なる印度民原は大に之に怒り妻は何如なることありとも其良人に同行すべき筈なるに父母に至る迄が之を止むることを以ての外なりとて相申合せて金を募り之を彼の少年に與へて公事の入用とし法庭に訴へて妻の取戻を願出させたり。

法庭は印度の習俗によつて裁判したれば少年勝つて彼の可憐孃いよ〳〵之に伴ふべきことと定まつたるとき頓はかにコレラ病に罹つて死しぬ父なる人も亦た大なる負債に苦しみ遂に彼の森林内の家を見棄て全家族今まは定る所もなく先きより先

きへと漂泊し乍らも至る所ろの假寓に於て其子女に教育を施すことを怠らず特に彼の家を出るときは女史既でゞ九才の齢なりしとは云へ父母は特に之を許して婚姻の約を爲さしめざりしかば女史は斯る漂泊の不幸中にも尙ほ幸にして身を自由にし只管すら修學するを得たり。

寄書

○岐阜縣下の清徒に告く　　在京　安藤たね子

妹は女學雜誌第百二十號に岐阜縣下妓樓の設置あるを讀に及んで嘆聲を發するもの之を數にす今や妓樓の昇む可き之れを廢止せさる可らさるは世間大方の滔々之を論せらるゝあるありて敢て妹輩が喋々を要せざる所なりまた敢て妹輩が岐阜縣下の勢力に逆て禿筆を染むるに足ざれ共妹や固と同縣下の産にして日夜彼地を懷ふて寤寐にも之を忘れず只だ其地の繁榮にてあれ只だ其民の高尙にてあれかしと熱望するの折柄乍ち此の一報に接して憤慨自ら禁する能はず遂に身の鼻陋をも打忘れ聊か思ふ所を述ふるに至る。

回顧すれば我岐阜縣や嚮に師範學校女子部廢滅の不幸あり妹輩當時に思へらく時の可ならざると勢の好からざるとを如何せん蓋し尺蠖の屈するは伸ひんとするの兆なり天又何ぞ我岐阜縣を憐まさるあらん必すや他日大に伸ふるを得ん又大に我岐阜縣文物の進歩を得んと心密ヿ前途に望を屬し只管ら我岐阜縣愛國有志諸君の奮て此地に一大新地を開墾し良種をまき良果を得るの愉快あらんと思ひきや新地の開墾未た着手するの力なく况んや未た良種を降すの便なきにはや雜草莊々として手を着く可らさるに至る之を思へは妹輩まことに長大息の至りなり。

更に眼を轉して今日我日本惣躰の景況を觀れは有志の士愛國の君繩々勃興し德義を述べ道を傳へ頽敗の國力を救ひ道德の墮落を救はんと手に唾し腕を扼して奮起せらる尙聞くならく高知に廢妓の縣會あり根津に引拂ひの命ありとまた以て國勢一般を見るに足ん。

吁岐阜縣獨り妓女を舊習に甘んせしめんとする乎岐阜縣獨り男子の遊蕩をほしいまゝならしめんとする乎吁岐阜縣獨り國躰を辱しむるを意とせさる乎抑も社會の安寧は德智躰三育の完美なるに如かす今ヤ妓樓の設置は最も其德育を害するもの也敬愛なる同胞姉妹をして牛馬の境遇に至らしめ男子の玩弄物たらしめ有爲なる丈夫をして牛馬と交を結ひ貴む可き人類を器械視せしむ德義のすたる之より大なるはなし男子立志出郷關學若不成死不歸ノ士一度芳原に遊ひ再ひ根津ヿ戯れ始めの言辭何處に去るや終りの果は車夫馬丁となりあたら學智を磨き得さるもの滔々として多きは現に諸人の知る所なり而して其及す處の躰育の害を述んも愚かなり寔に如此社會に錯亂を來らしめんものは未た必しも同胞姉妹の罪ならす又以て放蕩男子の罪ならす其之をなさしむる妓樓の罪なりソモ婦女一度此に沒入するものは其故或は父母の難を救ふにあり貧困百方計不得止に出つ吁金錢の爲に身を牛馬に墮すもの實に憫む可きの極ならすや已に此設けあり男子の之を弄ふまた責む可らず之を如何ともするも其源妓樓に出づ妓樓の罪まことゞ大なり或人は論せられん國に娼妓なくんは淫奔見るに忍ひすと蓋し思ふに德義の貴はれざるに出つるのみ德義若くも盛ならば豈に之を憂ひんや。

大山の將にくずれんとするや一指のよくさゝふ可きに非ずことに不肖の妹輩如何にもがき如何に苦しむも何んの効あるなし妹輩徒に嗚呼の嘆聲を發して退かんのみ只切に岐阜縣人諸君に希くは妹輩の微意を察し早く前途の計を謀られん事を祈念に耐へす。

新報

（此欄内自由に轉載するを許す）

○無禮なる外國人

去廿八日の大坂朝日新聞に據るに、去廿五日神戸より横濱へ向け發したる彼阿會社マルハ號乘組水夫某なるもの、船客磯田喜代松の妻なるものに對し、言ふに忍びさる無禮の處行を爲し、吾人日本民の姉妹に極大の恥辱を與へたる由に聞く。抑も如此き禽獸的の外國人をば容赦なく速刻に取調べられんことを切望するは勿論、如此きは元と白人種が東洋人を輕蔑するの習慣に基づくものなるが故に、斯る際、我政府に於て尤も斷行したる措合のあらんことを熱望す。

○日本赤十字社の歷史

日本赤十字社の由來に付て、承わる所ろ左の如し、我が仁慈なる皇后陛下が、夙に之が擴張に思召深く、其他博愛を重んずる諸ろ〳〵の婦人諸氏が高意を奉躰して大ひに之に盡力せらるゝを聞き、切に感謝喜悅の至りと思はる、故に今ま左に同社の由來記を掲げ、更らに諸姉妹が同情の念を厚うせられんことを望む。

我邦赤十字社の創立せし以來の沿革を調査すれば明治十年二月西郷隆盛の鹿兒島に兵を擧ぐるや反徒は多く舊時の武士にして然かも殊死防戰せしことなれば死傷の夥多なる實に云ふべからさるものありしなりされば、天皇皇后兩陛下には大に宸襟を惱せ給ひ傷者を憐み特使を戰地に發遣して忠勇なる兵士等を救護慰撫せしめられたり是に於てか華族の輩大に聖恩の厚きに感奮し三條、岩倉の二公同族中に說きバロンシーボルト氏が起草せる歐洲救護社略記を送りしに同族諸氏には大に奮勵し巨多の金額を募集したり此の時元老院議官たりし大給恒、佐野常民の二氏歐洲救護社の例に基き博愛社と云へるを設け其の許可を政府ヿ出願せんとせしに折節佐野氏は九州派遣の命を受けたれば熊本に到り征

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

討總督熾仁親王は博愛社の社則を捧げて指令を請ひたるに直に許可の指令ありたり因て佐野氏は一面は結社許可のことを東京の大給氏に報道し一面ハ公務の餘暇を以て直に有志者の協賛を促し醫を聘し看護人を募り軍醫部と協議の後之を各所の軍團病院に派遣して救護に從事せしめたり大給氏ハ佐野氏の報道を得るや直に征討總督宮より結社の許可を得たることを太政官に上申して其の確認を受け松平信正、松平乘承、櫻井忠興其の他十三名の華族と同盟して本社を立て有志者の協賛を促がせしかは金圓物品を寄贈する者陸續絕ねず天皇陛下にも同社の趣旨を嘉し賜ひ金千圓を下賜せられたり其の後幾もなく彰仁親王殿下同社の總長たることを諾せられたり聞く西南の役に賊軍の負傷せしもの二名を救助せりと其の後皇后陛下には常に聖意を同社の事業に留めさせ給ひ明治十六年以後年々金三百圓宛下賜の命ありたれば此の殊恩に感激し一層奮て社業の擴張を計畫し歐洲赤十字社の組織及びジユネーヴ本局と公然交際を開くの手續を調査するとに決し同社員柴田承桂氏を歐洲に派遣し種々實際の取調べをなし大山大臣橋本軍醫等も歐洲より歸りて報告する處あり遂にジユネーヴ條約に加盟することゝなり社名を日本赤十字社と改め社則を改定して政府の認可を得兩陛下眷護の下に立んことを請願して其許可を受くるのみならず年々五千圓宛下賜せらるべきの特典を被れり爾來同社の事業ハ追々發達し先比同社第二回の總會を開きし節ハ社員の數五千名に及び其の年醵金及寄附金の額も少々にあらざれば未だ世間に向て其の金額を公言するが如きの場合に至らず皇帝陛下より特に十萬圓の下賜ありたれば此に始めて同社の面目を稍々改むるを得るに至りたり然れども歐洲諸國の數百萬圓の資金と數億萬の社員とを有するに比すれば實に九牛の一毛だに若かざるものあるを以て今回瑞士に開く萬國赤十字社創立二十五年紀の祝典を擧行するに際し日本赤十字社現在の有樣を報告するに赧面に堪へざる者あり以てこゝ廣告をなして社員の加入と寄附金の多きとを望みたる者なるべし世の國事を憂ふる者ハ同社の社員となり寄附金をなし今回の報告に實てハ歐洲諸國に對し赤面せざる樣なしたき者なり。

○東京婦人矯風會　同會の書記佐々木豐壽君は同會雜誌の事務甚はだ多忙なる上に女學校の事務も亦相應に多事なるより止を得ず今度書記の任を辭退せられたるよし附ては竹尾こと君之に代り尙ほ井深せき君會計と爲られたる由なり。

○修身職業女學校　同女學校は佐々城豐壽潮田琴其外の發起に由て成れるものにて元と東京東部婦人矯風會にて幻燈會を催ほし其入金の一部を米國婦人禁酒院の建築費に寄附し其の殘額を以て設立費とし最初は專ぱら婦人矯風會の女學校と爲すべき計畫なりしが中途に都合あつて遂に公けには其關係と爲さざりしなれども同學校の主義目的に至ては純然たる婦人矯風の精神に出るものと云へり左れば今度佐々城女史が暫時仙台に遊ばるゝに付ても同校向后の維持法に付ては不在中他に尙ほ大ひに盡力せらるゝ人々あり夏休后は一層に校務を擴張するの望みも之れ有るやに承はる。

○東京府レース製造所　同所の雇教師英人セント、ジヨン女は目下姙娠中にて授業し兼る趣申出でたるに付近日解任せる由なるが最早外國人の授業を待たずして是までの補助たりし日本人にて十分なれば更に外國教師を雇入れざることに決せし由。

○高等女學校　同校は本年規則の改正により四ヶ年の學期は五ヶ年となり生徒をも六十名增員せしに付是までの建物にては何分狹隘なるに付き百二十坪の新築を爲し來九月十一日までには竣功せらる見込なりと云ふ猶ほ本年よりは博物陳列室手藝教場等をも新設せしむる趣なり。

○東京府下女學　去七月廿六日の官報に昨二十年東京府學事の概況を示されたるが其中ち女學に關する分左の如し、

高等女學校と稱すべきものは前年迄は一校もあらざりしが本年に至り私立各種學校中修身和漢文英語算術唱歌裁縫理科等を教授するものにして高等小學科以上の程度に位するものを高等女學校に變更せり其校數八生徒九百名にして學業は漸次進歩の狀況なり教員の資格は別に一定の規程なきも孰も高等の學術を修めたる專門の教員なり今日女子の高等普通教育に不便を感ずるの際此種の學校は最必要なれば尙ほ其教育方法を改良し且其增設あらんことを望む。

幼稚園の數は十五ありて内町村立七、私立八なり、保姆は十八名、幼兒は男四百十一名、女三百四十九名あり之を前年に比較すれば園數四、保姆三名、幼兒三百五十七名を增せり其保育の狀況は漸次進歩し其中には稍々整頓したるものなきにあらざれども多くは資金の充分ならざる爲め準備上未だ欠くる所あるを免かれず且つ保姆其人に乏きを以て充分の保育を施すと能はざるの憾あり」書籍館は私立一ヶ所あるのみ其書籍は和漢洋併せて一萬千六百六十部にして其閱覽人は千九百四名あり書籍館の設置は教育上裨益する所少からざれば其增設あるは希望する所なり。

將來學事の施設上に關する須要の事項少からず今其大要二三を擧ぐれば小學簡易科幼稚園高等女學校の設置小學校教員待遇の方法實業教育の施設私立小學校教員の改良等なり。

○山口高等女學校　七月廿六日の官報に曰く山口縣に於て昨年有志者の設置したる山口高等女學校は爾後益々改良を加へ教員を撰び其他諸般の準備整頓せるを以て愈信用を得入學を申込むもの稍々絕へず遂に數回募集するに至り目下現在生徒百二十六名あり本縣に於ても私立學校中最も屬望する所なり。

○青森の貸坐敷　青森縣東津輕郡小湊村邊にては鐵道敷設の爲め數千の工夫土方集り來りて風俗を潰亂するの擧動少なからざるより營利かたがた貸坐敷の新設を出願したる者ある由なるがなどて此頃は斯樣に賑いまはしきとの聞ゆるならん。

○越中婦人教會　越中富山に於ては桐溪印順藤枝令道兩氏の周旋にて越中婦人教會なるものを設ふけたり同教會は佛教主義にて府下日本橋區橋町の婦人教會と氣脈を通じ運動する由。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○東關義塾　青森の同塾の有志者は同地方女子教育の振はざるを慨き弘く教育家と協議し一大女學校を設立せんと目下計畫中の由。

外報　（同前）

○デュマーク皇女　同皇女は其道に精しき一侍女に附きて同國の名産たる木材彫刻の術を御修業のよし也。

○米國獨立祭　米國女子雜誌此頃到着の分に云く、マッサチウセットの男子輩は女子に投票權を與へず即ち女子の承諾を經ずして之に税を課し之を勝手に支配する所ろの男子なるが過る六月米國獨立祭の折りにはバンカーヒル激戰の紀念祭を催うし旗を立て樂を奏し昔し彼の英國の非道の課税に反對して我の爲に死したる人々を祝し乍ら今は現に米婦人が其手の下に苦しむを顧みず云々と論じたり。

○ガーフヒールド夫人　米國前大統領ガーフヒールド氏の未亡人は嘗に金一萬弗をウイチタのガーフヒールド大學に寄附せられたり。

○女齒醫　米國にて最初の女醫者はフヒラデルフヒアのアンニー、ロムベルガー孃(Miss Annie Romberger)ならんとの說なるが同孃は十五年以前にペンシルバニア齒科醫學校に入て卒業し其后十二年間實業に從事し當今は年々六千弗程の入金ありと云ふ。

小供談

○心の變り易き人（上）

或る金持の息旅行を思ひ立ちまして澤山金の入たる袋を自分に脊負ひ二三里を行きますと非常に疲れまして一歩も歩まれませぬ時に白き馬ゝ跨り意氣よく來る少年がありました熟ら其馬の足の運を見るに球を弄ぶ如し誠に愉快に見へる斯る馬に乗りなば此の重き荷も持つに及ばず疲れたる足を引くに及ばぬ事なりと思ひまして種々と其少年に願ひまして其袋と馬とを交易致しまして喜ばしく馬に跨り途に就きましたなれどこれ迄只の一度も馬に乘たる事がなき人ゆへ馬は中々思ふやうに歩みませぬものよりして力をこめて鞭ちました處が馬は大に立腹したと見へ急に後足を上け飛び上りました其はづみに其身は前に落ち馬は獨り走り去りましたが幸ひ田より歸る百性の牛を牽きたる人が通り懸りまして漸く其馬を捕へてくれました、されど前の事に懲まして其馬を百性に與へ其代りに百性の牽てをりました大牛をもらいました夫より其牛に乘りまして徐々と行きながら心の中に思ふには誠に好き事をした牛なればこそ乳も得らるゝしバッタも作らるし又肉も食へるゝ誠に得をしたと喜びながら腹がへりたれハとて乳を飲まんと乳を搾りました幾ら搾りても一滴も出ぬものですから一生懸命に乳を握みましたれば牛は驚き走りました其時不幸にも急所を蹴られたと見へ其儘其所に仆れました時に通り掛りし商人は水を飲ませなど致しまして漸く蘇生致させました夫より段々と樣子を聞きまして能く其牛を見ますると其牛は餘り老牛にて百性の用にこそ立て乳の出ざるも道理なれと申しますると彼の旅人は泣く／＼斯んな畜生は用ゝは立たずドーゾ其豕と換へてたべと願ひまして其豚を牽きながらこれでも賣れは五六圓もする品數日の旅は自由なりと喜ひながら道傍の或る茶屋に腰打掛け自慢氣に聲高々と話して居ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●滯金催足

岡山東田町　大島貴努

磐城國磐城郡玉山小學校　草野金三郎

大和五條聖三一公會　荒木政利

右は本誌代金滯り居候に付數回御催促申上候得共今に御送金なきのみならず何等之御回答も無之く甚はだ以て不信切無頓着の至りと存じ候に付更らに本誌廣告欄内に於て及御督促候也

明治二十一年八月　女學雜誌社會計掛

成立學舍女子部　高等師範學科、本科、初年科

各級に臨時入學差許候有志者は至急申込むべし

東京駿河臺袋町九番地　私立成立學舍女子部

私立明治女學校生徒募集

學年試驗相濟候に付最下級へ三十名其他欠員有之候級に限り入學を許す八月三十日迄に學業履歷書を添へ郵便にて申越さるべし在地方の人々には右書狀に據つて入學の出來べきや否やを答述すべし

東京飯田町三丁目卅二番地　明治女學校

宮內省式部次官高崎正風君序○○加部嚴夫著

交際必携　婦女のかざし　繪入洋製美本一冊

正價金廿六錢郵稅金十四錢

此書は凡婦人の朝拜々謁待宴奉送迎の心得皇族大臣府縣長官學校長教師に對する禮法より貴人紳士の宴會夜會舞踏會並同輩一般の禮法即ち行儀作法進退應對より庖廚食卓整理等に至る迄方今宮中及民間に行る者を擧げて編纂せし者なれば貴婦人女學生其他婦人方に必用なる書也

東京日本橋通四丁目書林椀屋　江島伊兵衛

●基督教新聞　第二百六十二號　八月一日發兌

社說●東京の傳道○岐阜縣の不正業問題○境遇の勢力●教報○明治學院及び同志社生徒の傳道其外數件○西遊略記（平岩恒保）○米國よりの投書○外報●雜錄○偶感●前週彙報

東京新橋日吉町二十番地　警醒社

クレームシモン廣告

クレームシモンハ巴理ノ最モ名醫ノ勸メル所ニシテ美麗ナル婦人ハ皆是ヲ用ユ、此藥ハ他ニ其類ナク一夜中ニ面胞(ニキビ)、胼(ヒビ)、寒瘡(シモヤケ)其他皮膚一切ノ出來物ヲ治ス又皮膚ヲ白クシ强クシテ且香氣ヲ添ユ

プードルシモン(粉)サボンアラクレームシモンハ共ニ同シ香氣アリテクレームシモンノ著シキ功能ヲ全クス

一手賣捌　橫濱五拾一番　アキユルチー

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

交詢案內

（催促する勿れ郵券十錢送れ委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

九　下婢　年齡三十年より五十年の內の下婢一人を望む業務專ら飯炊勝手仕事折々洗濯等あり家族三人家事稍閑なり給料は面談の上可成基督信者を望む

●雇はれたき方（乙）

一五　召使　年齡十八才にして小學高等科卒業生にて小間使となり半日通學勉强いたしたし但し己の口を糊するたけ

●喜びのめぐみ

五　乙第十壹號は神田猿樂町某と相談纏りたり

六　乙第八號は先方にて相談調ひしよしなり

七　乙第十六號は先方にて相談調ひしよしなり

八　乙第十七號は同前

關輪正路纂著○木村熊二田口卯吉兩君序

女子必携 **今世ひめ鑑** 全一冊 定價五十錢 郵稅錢八

右出版いたし候是非は自から公評あらん凡そ當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵悉とく記載し有之候蓋し右の「ひめ鑑」の重寶なりしとを御存知の方々は此開化したる當世のヒメ鑑の亦同樣に助けあるとを想像し玉ふべし

八木兼辰先生畫

東洋畫手本 蘭竹菊梅 二帖 定價金六拾錢

此帖は即ち學畫の楷梯にして四君子より始め花卉鳥獸蟲魚人物山水に至るまでを逐次に模寫し疎あるも浮薄に流れず密なるも刻滯に陷らず加之折枝は陰陽向背を詳かにし又三方を明らかにし此法によつて花を插めば自然法に適ひ趣をあらはす山水は吾國有名の眞景を寫し獨り用筆用墨のみならず目未だ見ず足未だ踐ざる奇勝名景筆下に集輯す人物は故實に徵し古圖に基き畫を學ふと共に智識を廣くし吾國他の美術上にても亦鴻益あらんとを期す近刊四君子の部就いて購覽あれ。

東京日吉町八番地 女學雜誌社

發兌

七月。七日 十四日 廿一日 廿八日
八月。四日 十一日 十八日 廿五日
九月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十月。六日 十三日 二十日 廿七日

定價

一册。五錢 郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十册。四十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は無代價にて引受く女學關係の書籍は一部寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1,43 six months, *yen* 2,86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田呉貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年八月二日印刷
明治二十一年八月四日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐